【新潟県中越沖地震災害救護活動報告】

呼吸器科部　医師　田原　正夫

「平成 19 年新潟県中越沖地震の災害救護活動について」

7 月 16 日に発災しました新潟県中越沖地震において救護初動班員として災害救護活動に参加しましたので報告いたします。

発災時、大阪でも揺れを感じたようですが通勤途中であったため気づかず、病院到着後に発災と救護班派遣の可能性があることを知りました。その後救援部からアラートがかけられ、救護初動班第 1 班として医師田原、看護師長立花、看護師平譯、倉、主事相良、滝沢（敬称略）以上 6 名が病院に集合。装備、資機材の準備、積み込み後、同日午後 2 時半に当院を出発しました。

救急車で約 9 時間かけて現地災害対策本部に到着し、活動拠点となる刈羽村へ移動。道路は寸断されナビどおりに走行できず、現地到着は翌 0 時半でした。刈羽村村民第 2 体育館に資機材を搬入し、急ぎ診療の必要な方を診察後、仮眠をとり翌朝から本格的な救護所の設営と診療を開始しました。発災２日目午前は外傷が多く、骨折疑い、切創、打撲、擦過傷など発災当日は避難に必死で翌朝になり受診した方が多くおられました。午後からは「高血圧で血圧が心配」、「持病の薬がなくなった」など相談に訪れる方が多くなり、3 日目には不眠や風邪、頭痛など疲労と精神的なストレスによる訴えが増えました。幸いなことに初夏の新潟は気温、湿度とも高くなく、これが真夏や真冬での被災であれば体調不良者はさらに増えたのではと考えます。3 日目昼に救護所を撤収し診療情報を村内の他県日赤救護班へ申し送り帰阪しました。医療資機材が限られたなか、様々な疾患・問題に対処することは容易ではなかったのですが救護班のチームワークも良く、臨機応変にできる限りの対応はできたのではと考えます。私個人的としては被災地で傷病者の診療に携われたことで医療者しての純粋なやりがい、責任を改めて強く感じることができました。

資機材を積み込む救護班員

診察中の田原医師

12階B病棟看護師長　立花 真理子

「新潟県中越沖地震の救護活動に参加して」

7 月 16 日から 18 日まで中越沖地震救護班に参加しました。出発したときは「ほんとに私でいいの？」と不安でいっぱいでしたが、17 日の深夜に避難所のひとつの刈羽村第２体育館に到着し、さっそく救護活動を開始しました。打撲や擦過傷、疲労などがおもな症状で、2 日間で延べ約 60 名の患者さんが来られました。中には、骨折の疑いの方や、足底にガラスの破片が入ったままの方もあり、「どうやって逃げたか覚えていないが、気がついたらこうなっていた。」と言う方がほとんどで、地震の大きさとそのときの恐怖が感じられました。診察や処置の合間にも、できるだけ地震のときのことや現在の状況についてお話を聴くことで、「こころのケア」につなげられるよう意識したつもりですが、地元の方たちの温かい心に触れて、癒されたのは実は私たちのほうだった気がしています。

今回、救護に参加してまず感じたのは、チームワークの大切さです。班長の田原先生がリードしてくださり、私達看護スタッフが動きやすかったのはもちろんですが、主事のお二人がフットワークも軽く、書類の作成なども引き受けてくださり、医療活動に専念することができました。また、周囲の方々の支援のありがたさも強く感じました。現地で連絡調整などに当たっていただいた支部の方をはじめ、救護班を送り出したあとのフォローをしていただいた、全ての病院職員の方々の協力があって、救護が成り立つのだと実感しました。

問診をする立花師長

管財課　主事　滝沢　文宏

「新潟中越地震報告」

平成 19 年7月 16 日 14 時 20 分頃、医師・看護師・主事総勢6名で大阪赤十字病院から新潟中越地震医療救護班として出動しました。

現地の状況としては、道路に亀裂や隆起しているところなど、車では通れない場所が数多くあったり、電信柱が倒れていたり、線路が波打っていたりして地震の規模の大きさを感じずには、いられませんでした。また、ライフラインでは、水道が使えなくなっており、トイレは仮設で風呂なども入れない状態でした。救護班として、3日間しか現地に滞在していませんでしたが、水道が使えないことに一番ストレスを感じました。

救護活動としては、刈羽第2体育館という 300 人前後の方々が避難されているところで救護所を設け、診察をすることでした。滞在した3日間で、約 70 人の方が来られました。疾患・症状の主なものとして、擦過傷・打撲・捻挫など震災で負った外傷や、不安・不眠などのストレス症状でした。夜間は車内で睡眠をとっている方もいて、エコノミークラス症候群も心配されるところでした。

今回わずか3日間で、出来ることには限りがありましたが、医師・看護師が病院のように全ての材料が揃っていない状況で、臨機応変に対応されていたので、さすがだなと思いました。私たち主事のできることは、医師・看護師が最大限に医療行為に専念できる環境をつくることだと心掛け、3日間活動しました。

被災地の方々は、これからも大変な状況が続き、精神的にも体力的にも、今後の生活への不安も大きいと思いますが、一日でも早く復旧し、普段の生活に戻れるよう頑張っていただきたいと思います。

最後に、衣食住の有り難さ、日常生活がいかに恵まれているかなど、普段感じることが出来ないことを感じることができたので、今後の人生に少しでも活かしていきたいと思います。

刈羽村村民第 2 体育館